虹（にじ） 左手でつむぐ心の言葉

自宅で絵手紙を描く大川さん

㉔④ 病に負けず創作に喜び

はがきに文鎮を載せ、左手で筆ペンを握る。春らしい日が続いているから、題材はツクシとフキノトウ。思いついた絵を描き、言葉をつむぐ。黒部市の大川恵津子（おおかわえつこ）さん(81)は、ペン立てや花鉢に囲まれた自室の机で絵手紙を描く。

脳梗塞で右半身がまひしたのは、10年前の71歳の時。利き手の右手は今も、じゃんけんのグーのような状態のままだ。発症した当時は話すことも、歩くこともできなかった。気持ちはどん底まで落ち込んだが、リハビリに励み、会話に不都合がなくなり、つえを突いて歩けるようになった。

発症前から趣味にしていた手芸を再開し、左手だけで刺し子や花のリース、押し花の作品を作り、絵手紙も始めた。完成したものは友人らにプレゼントしている。「喜んでもらえるのが好きだから」。優しい笑顔が浮かぶ。

◇

黒部市出身。桜井中学校（現明峰中学校）を卒業後、親戚の営む青果店で働いた後、ファスナーの製造会社に就職した。23歳の時、４歳年上の繁男（しげお）さんと結婚。自然に触れることが好きで、野山に行って花を眺め、キノコ狩りやスキーにもよく出かけた。

会社を定年退職した後、繁男さんが脳梗塞を患って右半身がまひし、自宅近くの病院に入院した。大川さんは、その病院から入院患者の朝食を作るパートの仕事を頼まれ、引き受けた。繁男さんは入院したまま８年余り後に亡くなった。

その２年後、大川さんにも病魔が襲う。調理場で仕事をしていると、急に言葉が出てこなくなり、病院で検査を受けた。その後、右の手足が動かなくなった。夫と同じ脳梗塞だった。普通に話しているつもりでも、周りの人には「むにゃむにゃ」と聞こえるだけで言いたいことが伝わらない。歩くこともできず、入院先で車椅子生活となった。「自分の体を思うように操るのはこんなに大変なことだと知った。ショックで何も考えることができなかった」

長男の満（みつる）さん(56)は当時、父と同じように寝たきりになることを覚悟したという。ただ、医師からは、右手を動かすのは難しくても、頑張り次第で脚は動くようになると言われていた。「心を鬼にして『リハビリせんにゃ』とか『少し歩かんにゃ』と声をかけていた。母も『これ以上迷惑かけられん』と思って、努力したと思う」と振り返る。大川さんも「そんなん言われるんだったら、頑張ってみようと思った」と話す。

満さんの妻からは、動く左手で書く練習をするノート１冊を渡された。利き手ではない左手で線を引いたり、円を描いたりすることさえ、うまくいかない。努力している姿は子どもたちに見せたくないと思い、使い終わったノートはこっそり捨てた。リハビリで使ったノートはその後、17冊にまで増えた。

体重は落ち、鏡をのぞくと、もともとふっくらとしていた顔にしわが目立った。不自由な生活が続き、笑顔は消えていた。だが、「体が不自由になって、落ち込まない人はいない。落ち込むのが当たり前」と思うようになった。

大川さんは、かつて勤めていた会社の退職者でつくる歌謡同好会に所属し、年に１回のカラオケの大会に出場していた。脳梗塞から半年後に黒部市のコラーレ大ホールで開かれる大会にもエントリーすることを決めた。

リハビリでつえを突いたり、壁伝いに歩くことはできるようになっていた。だが、本番ではつえを使わずにステージに上がると決めていた。「障害があっても歌えるんだっていうことを意地でも表現したかった」

当日は、赤いバラの模様が入った黒のドレスを着た。裾を少し上げ、右脚を引きずりながら、舞台袖からつえなしでステージ中央に向かった。照りつけるライトがまぶしい。観客席で友人たちが手を振ってくれている。感極まりながら、おはこにしていた門倉有希さんの『ノラ』を歌い上げた。

◇

「何をすれば、私は元気になるがけ？」。右半身が不自由になってから、大川さんは自分に何度も問いかけた。

答えは、脳梗塞の前に好きだった手芸を再開することだった。元の自分に少しでも近づきたかった。

ふきんの刺し子に挑戦したが、左手だけで縫うことは難しい。最初は１枚仕上げるのに５日間かかっていたものの、続けるうちに上達し、２日ほどで縫い上げられるようになった。

友人からスケッチブックをもらったことを機に、絵も描いてみた。左手で円を二つ描く。描き進めていくと、地蔵になった。自分の中にある言葉や絵を描ける紙は「心の遊び場」だと感じた。

2022年、描きためたものをまとめた本を自費出版した。タイトルは『心に残る日々』。季節の花などの絵と共に心に浮かんだ言葉をつづった。

「一歩一歩　歩み　その中に　人生がある　その時　その時代の美しさがある　今日もまた一歩進もう」

発行した150冊は友人や知人に配り、同じ境遇の人たちを励ましそうと、リハビリをしている病院などにも贈った。

出版した後にも描く意欲があふれ、始めたのが絵手紙。はがきに絵やメッセージを連ね、友人たちに送った。

◇

大川さんは、病院から家まで歩いて帰る途中に、地元の商店街にある松倉呉服店のガラスに「喫茶」「Cafe」と書いてあるのを見つけ、入ってみた。

もともとは呉服店の子ども服を置いていたスペースを改装し、23年にオープンしたカフェ「四季折々」。店主の松倉しゅう子（まつくらこ）さん(78)が人が集まる場にしたいと思って開いた。

大川さんは、右半身が不自由でリハビリに励んでいることや、左手だけで手芸をし、絵手紙を描いていることを話した。松倉さんは「こんなに前向きでバイタリティーのある人がいるんだ」という驚きと、「多くの人に伝えたい」という気持ちが湧いた。「ここで展示会したらどう？」と提案した。

展示会は昨年４月から４カ月間にわたって開かれ、絵手紙400枚がカフェの壁に張り出された。展示会が終わった後も、絵手紙は15冊のファイルに収められ、見られるようになっている。各テーブルやカウンターにも、大川さんが新たに描いた絵手紙や、石に絵を描いたブローチなどが飾られている。

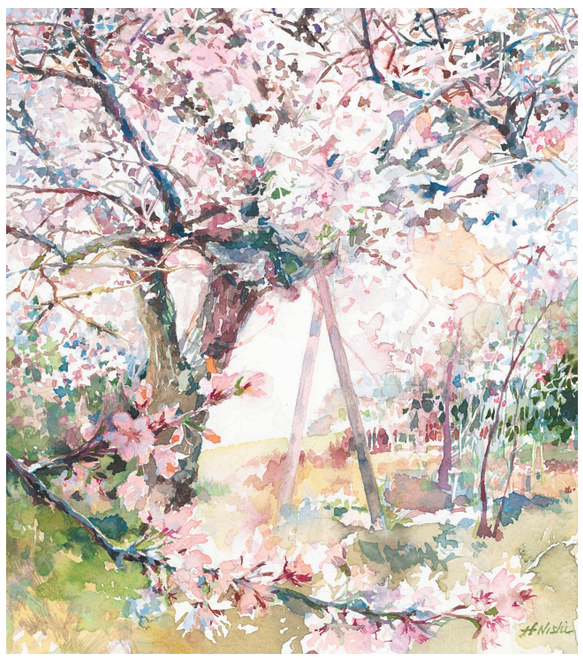
◇

大川さんがリハビリに通う病院には、脳梗塞の後遺症に悩んでいる人も多い。そんな人たちに、笑顔で「一緒に頑張ろう」と声をかける。本を読んでくれた人の中には、「大川さんのようになりたい」と言って、リハビリに励んでいる人もいる。その姿に大川さんも勇気をもらう。

リハビリがない日は、１人で外に出かける。早朝に天気予報を確認し、どこに行くかを決める。「なるべく外に出ていけば、それだけ人との会話がある。楽しみを見つけられて、元気になれる」

出かけるのは近くのショッピングセンターであったり、松倉さんのカフェであったり。目標を立てたら、時間がかかっても歩く。疲れると何度も休憩をはさみながら、無理をせずに目標の場所へと向かう。天候の悪い日や寒い日は、家でスクワットなどの運動をする。

日々の生活の中で、今度は何を作ろうかと考える。できた小物は誰にあげようかな。どういう顔をするかな。そんなことを想像するのが楽しい。


「古今の桜」西 治子

大川さんは体が不自由になっても、「過去の楽しい思い出を力に変えて頑張ってこれた」と言います。取材で話を聞いている時も、大川さんはずっと笑顔だったことが印象的でした。前を向く大切さを教わった気がします。

「虹」第９集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第９集『虹　海の匂いを覚えている』は2022年９月から24年５月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076（445）3352（平日午前９時～午後５時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933―0911　高岡市あわら町13―50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX　0766－25－7773
mail　niji@kitanippon.jp

次回掲載は５月１日（金）です。

紙面提供／人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局